

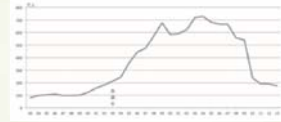
## 白神山地

- 青森県の南西部から秋田県の北西部にかけて広がっている標高1000m級の山地。
- 人の影響を受けていない原生的なブナ天然林が世界最大級の規模で分布している。
- 屋久島とらんで1993年12月、日本で初めてのユネスコ世界自然遺産に登録。
- 開発行為に反対する自然保護運動から、世界自然遺産登録に至った。
- 屋久島と白神山地は『ものけぼん』（1997年）の舞台のモデルとなったとされる。



## 観光地化する白神山地

- 白神山地は、遺産登録以前はほとんど無名だったが、世界遺産登録をきっかけに白神山地は観光の対象として考えられるようになる。



- 大手旅行社の観光広告が、世界遺産という言葉で大々的に取り上げ、白神山地を売り込む  
→白神山地の「エコツーリズム」ブーム
- 白神山地は東北観光の中心となったといっても過言ではない
- 青森の白神山地を有する西目屋村の一般住民の意識調査(2000年)  
観光客の増加が村の発展につながるものと理解しながらも、不安を感じる者も多いとの結果  
不安理由 ・自然環境の破壊 ・山への不理解 ・交通量の増加

## 入山規制の動き

- 世界遺産登録後、数十万人の観光客が押し寄せる。
  - 自然破壊を恐れる人々が入山規制を強く訴えかけるが、この是非をめぐる大きな議論が持ち上がった。
- 青森県：伝統的に山に頼んできた→「核心地域」への入山規制に対する抵抗感が強かった。  
秋田県：山が深く地元の利用が少ない→「核心地域」への入山規制に対して地元から大きな反発がなかった。
- 問題の本質は生活と深くかかわっている地元住民の立ち入りを規制するかどうか  
→山菜やキノコ、川魚の採取を生計の一部としてきた人々の山での生活を奪う結果となるから。
  - 1997年、青森側では入山申請が許可されれば27の指定ルートに限って入山可能。  
→2003年に登山目的の入山に限り、届け出制に移行（無届け入山も多い...）
  - 秋田側は原則禁止

## 観光利用へ

- 2014年頃から、入山規制の緩和や観光利用に向けた動きが出てきた  
（登録を機に観光客数は急激に増加したが、その増加は2004年までで、2005年以降は減少した）
- 「同じ遺産なのに両県で整合性が取れない」「山に詳しい人材が育たない」批判  
→焦点は秋田側からの入山解禁、有識者委は今後、新たな入山ルートの設定などを検討する方針
- 青森県はより積極的な遺産活用に乗り出す  
「従来の散策コースでは、積雪による冬季閉鎖期間が長い」  
「時期程度の気軽な散策をしたい」  
→新たな散策コースを検討し、集客増につなげる考え。

## まとめ

- 白神山地では、世界遺産登録以来、自然保護のための入山規制をめぐって青森県と秋田県の住民の間で意見が割れていた。
  - しかし近年は、両県とも入山規制を緩和し観光利用していくという動きになってきている。
  - 考察
  - 世界遺産を訪れたいという人々の思いをかなえることは、遺産を次の世代に伝え残し、自然への理解を深めるために不可欠なことである。
  - しかし、地元の人々の暮らしを妨害するような観光開発や、自然を傷つけるような観光の仕方ではあてはまらない。
  - 観光利用をしつつも、マナー違反へのさらなる注意喚起や地元の人に十分配慮した観光のありかたでなければならぬ。
- ・ 参考文献
  - ・ 資料(2014)『世界遺産登録と観光利用』（雑誌記事）→日本の100景編4号
  - ・ 経済産業省(2014)『観光のグローバル化と観光振興』→世界遺産「白神山地」を事例の中心として
  - ・ 国土交通省(2009)『国土 観光 未来編 2』→入山規制の緩和、観光と保護の両立を目指す
  - ・ 国土交通省(2014)『国土 観光 未来編 3』→入山規制の緩和、観光と保護の両立を目指す
  - ・ 国土交通省(2014)『国土 観光 未来編 4』→入山規制、観光と保護の両立を目指す